

オープン カレッジ

「日本人は全員、地域福祉の推進に努めることが決まりです」と言われたら、どう感じるだろうか。実はこれは、社会福祉法第4条に明記されている内容である。少子高齢化や人口減少、生活困窮者や孤独・孤立への支援が求められる中、世代や高齢者・障がい者・子どもなどの属性に関わらず、地域全員が参加し、協力して支え合う仕組みづくりが目指されている。

福祉のすそ野広げる「楽しさ」

か…」と感じる人も多い。つまり、方向性には賛成だが、主体的な参加や参画までには至っていない人が多い。

これまでの地域福祉の参加は、町内会・自治会への加入に代表される、居住を前提とした半ば強制的側面もあった。しかし近年は、核家族化や単身世帯者の増加など、家族機能や生活スタイルが変化している。また、福祉教育に代表される、「困っている人のために」という「正しさ」による学習や啓発、地域福祉計画の策定の参画に代表される、具体的な実践場面への参画による手法もある。しかし、これらだけでは主体的な参加が増えているとはいえない。

いて、一人一人の興味関心や想いを実現し、生かすアプローチの方法も検討されて良い。福祉への関わり方の焦点を、「正しさ」から「楽しさ」にずらすことが、福祉への関わりやすさを広げることにつながる。筆者自身も、学生時代のボランティア活動や震災復興支援活動、現在取り組むまちづくりNPOの実践においても、仲間との交流、新しいアイデアの実現、好きなことを選べる、といった楽しさを感じるから参画できている。

やってみようと思える仕掛けづくり

い」には、多くの人が賛同しているデータがあるが、「時間やお金に余裕があれば…」とゆれば良いの



日本福祉大学
経営学部助教授
浅石 裕司

あさいし・ゆうじ 専門は地域福祉、まちづくり、福祉機器。岩手県立大学大学院社会福祉学研究科博士前期課程修了(修士)。1987年生まれ。

れないため、新たな方法が求められる。

筆者は「楽しさ」という概念から、福祉への参加が広がる可能性を主張してきた。地域福祉およびまちづくり分野における「楽しさ」とは、遊び心がある、きっかけが多様である、互いの差異を認めて承認し合う、新しいことに取り組む、興味・関心が高まって夢中になる、目的を志向し過ぎない、という要素から成り立つ。個人化が進む時代にお

る。一人一人の興味関心や想いを実現し、生かすアプローチの方法も検討されて良い。福祉への関わり方の焦点を、「正しさ」から「楽しさ」にずらすことが、福祉への関わりやすさを広げることにつながる。筆者自身も、学生時代のボランティア活動や震災復興支援活動、現在取り組むまちづくりNPOの実践においても、仲間との交流、新しいアイデアの実現、好きなことを選べる、といった楽しさを感じるから参画できている。

また、福祉現場の職員不足は大きな課題である。その手立ての一つとして、ロボットや機器の活用が進められている。食事や入浴などの介助業務や、記録や情報共有、清掃、運搬などの間接的な業務の負担軽減まで、多様である。福祉施設から地域福祉まで、幅広い分野で新たなテクノロジーの開発、あるいは今あるテクノロジーを福祉の現場で活用していく工夫が、より一層求められる時代になる。「やらされる・こなす業務」が減り、利用者との関わりに時間を使えるようになること、工夫やアイデアが生かされるようになることは、支援の質や福祉の仕事の魅力の向上、やりがいや活気につながる。

新しいことに取り組む、興味・関心が高まって夢中になる、目的を志向し過ぎない、という要素から成り立つ。個人化が進む時代にお